個人

京都市

第三者目線に立つという事

米村 真悟 個人

取材日 2013.05.17

同志社大学大学院総合政策科学研究科所属。2012年の春、震災ボランティアプログラムの参加をきっかけに、宮城県浦戸諸島寒風沢島に深く関わるようになる。何度も足を運び、現地の団体と共に農地復興、島の復興にボランティアとして携わる。地元・京都でも寒風沢に関する情報発信のために、寒風沢のお米を活用したイベント開催などを企画した。

3月11日　14時46分

地震が起きた時は京都の自宅にいた。大きさは震度3～4くらいだったが、揺れが長く、異変と感じたので、このあと大きな揺れが来るのではないかと警戒をしていた。テレビを見ていたらニュースが流れ、大変な事が起きていると知った。そのあとはテレビにかじりつくようにニュースを見ていた。

実家は神奈川にあり、横浜でも地震による被害が出ていると聞いたので、両親が心配になって実家に電話をかけたがつながらなかった。実家は神奈川県平塚市で沿岸部に近い。被害があったのではないかと心配していた。この時点では正直、東北の事より実家に連絡できない事の方が不安だった。

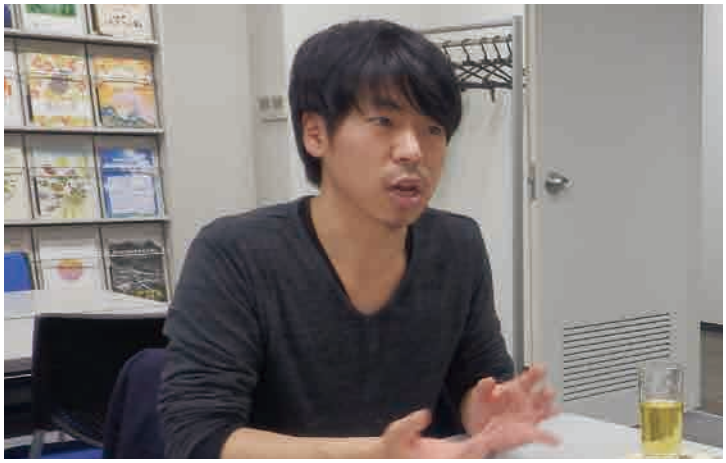
震災から1年後、東北へ

実は、震災後の1年間は東北へ行く機会は1度もなかった。もちろんニュースでは被災地の現状を聞いていたが、京都からは遠く、東北に行く事はなかった。東北に行ってみたいとは思っていたので、2012年5月に「Youth for 3.11」が行なっていた学生ボランティア派遣に参加して初めて東北を訪れた。それが浦戸諸島の寒風沢島で、田植えをするボランティアだった。

東北の事を何も知らなかった。本塩釜駅周辺は、例えば気仙沼のように、すべてが更地になっていたわけではなかったため、想定していた被災地のイメージとの間にギャップを感じた。多少の崩れや建物の上の方に津波の跡はあったが、想像していたほどではなかった。

2年目以降の復興の形

このボランティアプログラムは僕が参加する半年以上前から何度も行なわれていた。津波で流され田んぼに乗りあげていた車の引き上げ作業や、手作業で1つひとつ細かな瓦礫を取り除く作業を学



生達が行なっていた。田植えのボランティアは、自分達が大いに楽しんだボランティアプログラムだったのだが、その背景には、他の人が苦労して築いてきたプロセスがあった。田植えができる田んぼの状態にするまでに、肉体的に辛い作業を行なっていた事はあとで知った。

この背景を知った事は、2年目以降の復興の違いを意識した機会でもあった。初めてのボランティアを終えた後、自分なりに復興の現状について調べてみると、震災後は瓦礫やインフラの復興など最低限の生活は確保されて、1年程で復旧段階はある程度は終わった。2年目以降になると、住民が自主的に立ち上がり、10年以上続くまちづくりを意識しなければならない、とても大事な復興の局面である事を知った。

そして同じ事が、浦戸諸島・寒風沢島でも起きているとを実感した。なによりも、復興の経過がとても見えにくいと思った。問題が目で見えていた「瓦礫の有る無し」とは違い、そこに住んでいる人達のこれからの生活を不安に思う心境、住民の人間関係など、ただ島に行っただけでは見えにくい問題が現場にはあるのだと痛感した。

そうすると、ボランティアの支援内容も現場の状況に合わせて変えていかなければならない。その変化のタイミングの1つが、自分がプログラムに参加した時期だったのだと思う。ボランティアプログラムを実施しているYouth for 3.11の学生

達や関係団体の方といろいろな話をして、これからのボランティアの在り方について深く考えた。復興関係者の中には、ボランティアへ行く学生数の減少に悩んでいる方も多かった。参加する学生達がもっと被災地の現状を見つめる機会を作らなければならない。根本的な課題解決につながる活動をしなければならないと感じていて、より現状を知るためにもう一度島に行く事にした。

他人目線で大震災を見る

初めて浦戸を訪れたあとに、松島で島の住民が意見交換をする場があると聞き、一個人として参加した。話が聞きたかったのは寒風沢島の住民だったが、その場に寒風沢島の住民は出席していなかった。こうした場に寒風沢島の住民が参加していない事も、寒風沢島の復興の難しさかもしれないと思った。被災地でまず必要なのは、他の被災地の現状を聞き、被災地の方々が集まってこれからの復興、まちづくりを考えるために、コミュニケーションを取り合う事だと思う。そして住民達がコミュニケーションを取る機会を持てるように何かアクションを起こした方が良いのではないだろうかと考えていた。

島の稲刈りが終わった後、ある団体から、来年度グリーンツーリズムを一緒にやらないかとお誘いを受けた。復興支援というくくりではなく、あくまで島に来て楽しむことを目的に、島へ多くの方が来てくれるプログラムを作ろうと話し合った。しかし、ただ実施するのではなく、島の復興に合わせてグリーンツーリズムを行なう必要があると思ったため、まずは島の皆さんの考えをもっと聞きたいと思った。島には、僕のような島外の方との接触が多く、コミュニケーションに慣れている方もいれば、島外の方との接し方がわからない方も多かった。皆さんから話を聞くうちに、自分が耳にしている意見は、自分とたまたまコミュニケーションを取る機会が多かった方の意見に偏ったものである事を痛感した。結局ツーリズムは、島外の方を受け入れる準備を整える事ができず、実施には至らなかった。

よそものが寒風沢島にできる事

特定の被災地の復興に取り組むためには、現地に住む事が理想的だと思う。いろいろな支援の形があるが、復興としてやりがいを感じる一番の機会だ。しかし、学生の立場である今、それは難しい。だから、現地で島の皆さんと一番近い距離で話をしている関係者や団体と上手に情報を共有しながら、よそ者なりに島の発信をしていきたい。島の外にいるからこそ、少し広い目線でできる事だとも思う。

一口に「復興」と言っても、現地では復興の意味合いが幅広くなり、課題が複雑化している。その分、京都のように東北から離れた場所では、ことさら復興という言葉が風化してきている一面もある。そんな中、復興に関心を持つ人を増やそうと、2013年5月12日に「食」をテーマとしたイベントを京都で開催した。タイトルは「コメニケーションイベント　寒風沢島の贈り物」だ。2012年に寒風沢島で収穫したお米で参加者におにぎりを握ってもらい、少しでも寒風沢島を体感してもらおうと考えた。イベントゲストには食育の啓発を行なう京都の老舗料亭職人と、有機農業の促進を通じて持続型の社会を築こうとする社会企業家を招いた。前者にはおいしいおにぎりの作り方や食文化、食育の話をしてもらい、後者には有機農業まつわる自社の取り組みについて話をしてもらった。ニュースなどで伝えられる情報とは違う角度から復興を見つめるきっかけを作りたかった。イベント参加者から関心が高まったと感想を聞けた事も、とても良い経験だった。

当然ながら、真に自分が被災者と同じ当事者意識を持つ事はできない。被災者でもなければ身内に被害が出たわけでもない。無理に被災者と同じ当事者意識を持たなければならないと自分にハードルを上げるよりは、ある程度の他人目線を持った方が、長く続く復興には重要かもしれないとも思っている。現地の復興関係者の中には、地域の生活再建に急ぐあまり、1人ひとりの住民への細やかな目配りが難しい時もある。そんな時こそ、第三者目線の外部の人間の指摘や、補完も大事ではないか。その点では、京都にいる僕のようによそものの方が関わりやすい。復興は日本の地域社会全般の問題でもあり、農業や環境などさまざまな問題とつながっている。そこに自分なりの関わり方を見出し、当事者意識を持ちながら、自分の

撮影：2013.5.12　京都府京都市
「コミュニケーションイベント　寒風沢島の贈り物」会場

役割を考える事が大事だと思う。

自分がやりたいからやる

東北の復興に携わるまで、ボランティアはした事がなかった。当初ボランティアは、瓦礫の片づけのような肉体労働がメインであるイメージを持っていた。被災から２年が経ち、ボランティアの内容も瓦礫撤去から、人と関わる地域のソフトな活動に多様化していった。そうした変化の中で、一緒に活動していた学生の中には「ボランティアは必要なのか、なぜボランティアをやっているのだろう」と悩む人もいた。寒風沢島に関わる中で、「ボランティア」は、他人のための活動でありながらも、自分がやりたいと思った動機、「自分のため」である想いを大切にしなければと思うようになった。誰かに誘われて参加するのではなく、自ら自発的に、困っている方に対して自分なりの役割を見つける事が、ボランタリー精神の在り方ではないだろうか。その気持ちは東北の被災地での活動に限らず、日々の日常の中でもごく普通に見られるものだと思う。稲刈りや田植えを通じて、被災地のためだけではなく、自分自身が楽しんでいるから参加しているのだと思うようになった。逆に、そうでなければ活動を続ける事はできないだろうと感じた。

稲刈り時に集まった学生や社会人を再び集めて、浦戸諸島開発総合センターの体育館で手巻き寿司大会を企画した。用意してくれたお米を炊いて、学生達で酢飯にし、浦戸の海苔と、現地の方が調達してくれた海産物で手巻き寿司を作った。誰かに言わたのではなく、あくまで自分が手巻き寿司を食べたいだけだった。半分はこうしたワイワイ楽しい事をやりたくて、もう半分は、寒風沢島に集まった皆さんがつながるきっかけにしたいと思って企画した。そういう自分自身の動機を大事にする事が、ボランタリー精神を持ったボランティア活動の前提になると思っている。

活動を振り返って

ツーリズム企画の経験から、一部の関係者による内々の進め方ではなく、いかに多くの人の意見を聞きながら調整し、合意を得ていく事が重要であるかを学んだ。地域全体の復興を考えた時、１人の意見のみを聞き過ぎる事は良くない。なんとかしてあげたい気持ちを持ちつつ、そこをぐっと堪えて、多くの人の意見を聞きながら、復興課題の本質を捉え、なるべく被災地の皆さん全員の総意を構築していかなければならないのだと気づいた。地域のコミュニケーションを調整する事は難しく、だからこそ重要だ。

撮影：2012秋　宮城県塩竈市寒風沢
稲刈りに集まったボランティアの皆さん

撮影：2013.6.29　宮城県塩竈市寒風沢（EPOスタッフ撮影）

島の皆さんにアンケートを取る機会があったのだが、誤解を恐れず言えば、他人頼りになっている傾向があると思った。もちろん仕方がない面もある。一方で、中期的に自立していく必要もある。自分自身でできる事と、他人に任せた方が良い事かは、第三者目線に立てる者の方が目が利く。冷静にさまざまな意見を聞いて、物事の本質を見極める事が重要である事を、復興の現場が教えてくれた。